

「日常と現代アートを泳ぐスワン」

文章は2023年4月～5月にかけて書き留めたものです。

かねてから親交のあったordinary sculpture代表の山本さんより新たにできるギャラリー"callbox"のこけら落としに呼んでもらいました。とっても嬉しいです。
最寄りの大久保駅から異国感漂う道を抜け、雑多なビルの通りにギャラリーがありました。電話ボックスのように狭いからcallboxと名付けられたそう。"最小現代アートギャラリー"名乗るほど、狭すぎて中に入って鑑賞できないほどでした。

日本でもコロナ制限も緩和されたせいか、ここ数年の深い霧から視界が少しずつ晴れてきたような、周囲からも活動的な足音が聞こえてくる感じが最近しています。

僕はいまだに部屋からただ窓の外を眺めているような気分です。

コロナ禍真っ只中だったある日、あるラジオで「これほど道しるべのない、地図のない時代を過ごすのは長い人生で初めてです。」と(たぶんこのようなことを)言っていたのを聞いて、純粋にそうなのかと思っただけ、実際にこの言葉を体感するような日々が僕の中でも続きました。

コロナの霧が晴れて、改めて歩きだす道には人も情報も出来事もなにもかもが都心みたいに交差しているように想像できます。また人生の遠い旅が本格的に始まるような、この感覚をシルクロードに例えて考えたりしました。

小説家、宮本輝さんの「ひとたびはポプラに臥す」という宮本輝一行がシルクロードを旅するエッセイ本を読んですののですが、ずっとお腹を下しながら目的地を転々と旅する様子が書いてありました。まだ全部読んでないですが、しんどそうです。

いまの僕はまだ、Myシルクロードを踏み出すには億劫な感じがしていますが、日々はどんどん加速して進んでいく感じがして、もうすでに置いてかれた感覚でいます。

ここ数日間、親しみをもって聴いていた音楽家、高橋幸宏さんと坂本龍一さんの訃報が続き、なんとなく切なさをまとうせながら日々を過ごしていました。

音楽家の細野晴臣さんが高橋幸宏さんにあてた追悼文「人の一生は一冊の本のようだ。... 物語は終わったが、本は消えず、ずっとそこにある」という言葉、

坂本龍一さんの追悼で、各所が取り上げた「芸術は長く、人生は短し」という本人が好きだったという言葉、

ふたつの言葉から安易には想像できないほどの芸術の広がりのような何かを感じました。そして一応芸術に携わっている自分自身がすごく小さく感じられました。

僕の地元は北海道の小平町という海沿いの小さな町なのですが、とくに上京してからその海が僕の心に常に満ちているような、心象風景としていつでも思い浮かべることができます。たまたま仕事先で地元の話になって、そのあとGoogleマップのストリートビューで地元の話を巡って懐かしんでいました。

相変わらず町並みも水平線も彩度が低いというか、色味の少ないという印象がしました。

僕自身、常にちょっとだけ悲しさを抱えて生きているのですが、それは本当に悲しいわけじゃなくて、故郷の空気感そのものなんだと改めて思いました。

先日長野県の松本市にお手伝いを頼まれ行ってきました。よく行くところですが東京とは違う空気を吸ってリフレッシュできました。乾いた空気に、花に、山に、川に、建物に、お店に流れる音楽に、手にとる本に、思い返して今日も今日とてよかったなあと思いました。そばも美味しかったです。夜の松本城のお堀で白鳥が目の前を歩いていきました。手の届きそうな距離で水面に顔を入れたり出したりして、まるで僕らはいないみたいでした。ガン無視って感じが良かったです。

ギャラリーの山本さんと展示について、だいぶ横道にそれながら色んな話をしました。気も使わず深いところの話もできる人なので楽しかったです。

今振り返って何を話したかあまり覚えていませんが、山本さんはなにげなく「ほんとうに色んな考えの作家がおる」って言ってました。すごい当たり前のことだけど、たしかにその通りだと思いました。

会話の半分はメジャーリーグの話でした。山本さんは大谷、僕はイチローが好きです。

展示タイトルもまだ決まりませんが、告知用の絵を描くことにしました。色鉛筆の作品が数点あるのでそれでも良いかと思っていますが、前から考えていた構図のものがあつたので油彩で描き出してみることにしたのですが、人の顔が全然うまくいきませんでした。よくあると言えばよくあるのですが、本当に泣き出したくなるくらい嫌になります。たぶん8回くらいは消してやり直しましたが、結局顔だけくり抜かれたような形でその日はやめました。

でもなんだかんだ絵は完成しました。完成してしまうとあけない感じもします。これをきっかけになんとかタイトルも固まってきたようです。

こないだ、たぶん初めて新刊の小説を買いました。宮本輝の「良き時を思う」という本なのですが、たまたま人の手伝いをしたときクーポン券をもらって、それでせっかくだからと文庫版を待たずに買いました。展示が終わるまで楽しみにしようと思っていましたが、つい眠れない日に少しページを開いてみました。知らなかったのですが、新刊にはあとがきはないのですね。その本は九十歳の祖母が家族のために晩餐会を開く話だそうですが、帯を読むだけで豊かな気持ちになります。最近はとくに家族を思うだけで自分が生きている意味を見出せているような感覚があります。また休みができれば会いに帰りたいです。

今回、稲垣柚実さんという大学の同期だった人のイラストにエッセイを載せた印刷物を会場に置く予定です。事前にすこし読ませてくれたのですが、そこには僕の印象も書かれていて、自分の思っている自分とはちょっと違って面白かったです。

僕も大学の同期たちも稲垣さんのことを「しめ」とあだ名で呼ぶのですが、柚実(ゆみ)という名前はいいなと思っていました。でも「しめ」と呼んでいるので不思議です。

普段、僕から誰かに連絡することは用事がない限りほとんどしないのですが、不定期で連絡をくれる人も数名いてくれてそういう人たちの一言からコロコロと物事が動いたりするものです。不思議なのですが、人から連絡が来ない時は全くこないし、来る時は同時期にたくさん来たりするし、そういった波を感じる時は多々あったりします。

DMも刷り上がり、とりあえずできた作品を展示してみたり、今後のギャラリーのことについて意見を出し合ってみたり、展示の準備が整ってきました。メインの大きい作品の他に作品持っていったら空間いっぱいになっちゃったけど、みんなこれはこれでいいんじゃないかって言ってくれたのでよかったです。

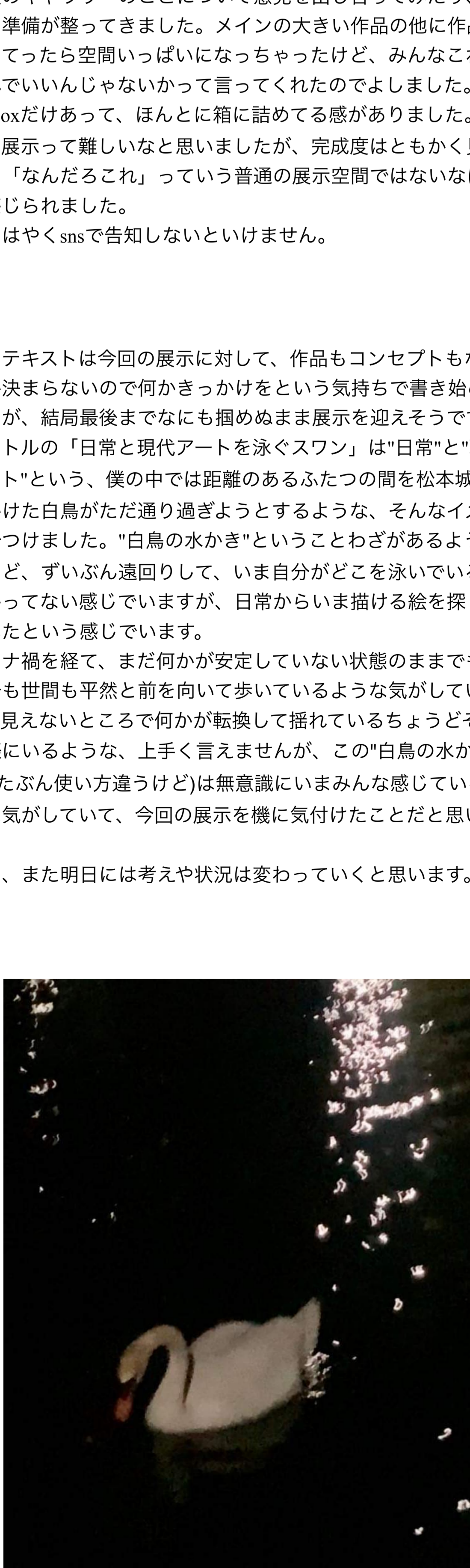
callboxだけあって、ほんとに箱に詰めてる感がありました。改めて展示って難しいなと思いましたが、完成度はともかく見たとき「なんだるこれ」という普通の展示空間ではないなにかは感じられました。

僕もはやくsnsで告知しないとイケません。

このテキストは今回の展示に対して、作品もコンセプトもなかなか決まらないので何かきっかけをとという気持ちで書き始めましたが、結局最後までなにも掴めぬまま展示を迎えそうです。タイトルの「日常と現代アートを泳ぐスワン」は"日常"と"現代アート"という、僕の中では距離のあるふたつの間を松本城でみかけた白鳥がただ通り過ぎようとするような、そんなイメージでつけました。"白鳥の水かき"ということわざがあるようですが、ずいぶん遠回りして、いま自分がどこを泳いでいるかわかってない感じがしていますが、日常からいま描ける絵を探して描いたという感じでいます。

コロナ禍を経て、まだ何かが安定していない状態のままでも、自分も世間も平然と前を向いて歩いているような気がしています。見えないところで何かを転換して揺れているちょうどその水際にいるような、上手く言えませんが、この"白鳥の水かき感"(たぶん使い方違うけど)は無意識にいまみんな感じているような気がしていて、今回の展示を機に気付けたことだと思えます。

でも、また明日には考えや状況は変わっていくと思えます。



松本城にて